

愛のスジアラ大作戦

(真夏の激闘編 果たしてスジアラ稚魚は・・・)

前号(289号H13.7)でスジアラ種苗生産の研修の様子を記載しましたが、今回機会が与えられましたので、その後のことを述べたいと思います。

石垣島での研修を終え心身ともひとまわり大きくなって鹿児島に帰ってきて最初に取りかかったのが、養成親魚の体測です。これまでは、体長と体重のみを測定していましたが、研修を踏まえ雌雄の判別も試みてみました。

すると、15尾のうち1尾が精子を別の1尾が卵を放出し今度は必ず産卵すると自信を得ました。早速採卵ネットをセットした翌日、採卵ネットの中には、小さく透明な球形の卵が朝日を受けきらきらと宝石よりも美しく輝いていました。その数90万粒でそのうち浮上卵が73.5万粒でした。ついに採卵に成功です。

卵は早速水槽に収容し初めて自場卵による種苗生産試験の開始です。

ところが、採卵できたことに浮かれていたわけではないのですが、初期の餌料となるタイ産ワムシの培養が不調で、2度の試験ともすぐに試験を中止してしまいました。

さらに、悪いことは続き7月に淡水浴を行った際親魚4尾が死んでしまい、その影響からかそれ以降産卵は見られませんでした。

結局、平成13年は6月24日からの11日間で総卵数810万粒、うち浮上卵数686万粒を得ましたが、種苗生産に結びつきませんでした。

平成14年度のシーズンは3月に新たに親魚を10尾搬入しスタートしました。

当初餌を食べなかった新入り群も既養成群と一緒にしたところ餌食いも良くなり2年連続の産卵を予告させます。

その結果、7月11日からの20日間で822万粒(うち浮上卵数665万粒)、8月8日からの18日間で564万粒(同301万粒)、9月8日からの15日間で195万粒(同151万粒)を自然産卵で得ることができました。さらに、それは新月から

始まり満月で終了し報告にあるような月齢に同調した産卵でした。

得られた受精卵を用いて種苗生産試験を5回実施することができました。

7～8月で4回の試験を実施しました。日裁協で教わったように数時間間隔の観察や飼育水、照度等に気を付けて試験を行いました。日令11～29までで減耗により試験を中止しました。これ以上手だてはないし、水温下降期にも入るし、何よりもう1回試験をする気力と体力が萎えていく気がして、もう諦めようかなとも思いました。しかし、周りの声に励まされ、最後にもう1回試験を実施することにしました。今回は用水を珊瑚礁で過後、紫外線殺菌処理したる過海水を用いさらに細かく観察しながら飼育を続けました。仔魚の状態は良く、次々に過去の飼育記録をクリアしていきます。そして、遂に日令82で約1,900尾(全長25～55mm)を生産することができました。さらに飼育を継続し日令138にあたる1月28日に平均全長56mmの340尾を笠利町の地先に放流しました。この放流が、自場で生産された初めての種苗です。



泳いでいく稚魚たちを見ているのは感慨深いものでした。

しかし、やっとスタートラインを超えたところでこれからが本当の勝負です。

今年も暑い夏になりそうです。

(栽培漁業センター 中野)